

I 沿革

沿革

本県文化の黎明は石器時代に始まる。森林におおわれ、葦の生いしげった不毛の原野に穴居生活をしていた人々の間に自然とのたたかいを絆ながら生活をきりひらいていた間に、階級や身分の別ができ、財産を所有するという考えが生まれ、次第に一定の土地に住んで農耕を営むようになってきた。鹿島、香取の両神を祖神と仰ぐ一部族が原住民を征服し、この地方を開拓したのはこの頃であったろう。西紀3・4世紀ごろには、身分のある人々、地方豪族等を葬ったと思われるいわゆる古墳群が県内各所に現われ、文化的勢が県北の地まで及んでいたことを示している。

奈良時代に選進せられた常陸風土記によると、崇神天皇のころ、東方経営に幾多の英雄が登場し、行方、筑波、新治、久慈等の地に討匪勤農に尽力せられたことと、この地を日本武尊が蝦夷征討の兵站基地とした模様。さらに成務天皇のころ、那賀(仲)、久慈(久自)、多珂(高)、新治、筑波の五国造が置かれ、次いで応神帝のころ茨城國造が追加せられたことなどが伝えられている。

大化の革新にあたっては、従来の常陸六国の名は郡名と変り白壁、河内、信太、香島、行方、石城(石城はのち陸奥に加わる)の6郡が加わり、北総の地に、結城、猿島、相馬、岡田等の郡が置かれた。毛野川(鬼怒川)、桜川、那珂川、久慈川流域の水田には、当時班給制が行なわれていたことが知られている。

中世紀に至って荘園が発生し、現在の西茨城郡岩瀬町加茂部を中心としたと伝えられている中郡庄、真壁郡協和町小栗地区を中心とする小紫御厨、同郡明野町にあった村田庄、筑波郡筑波町田中を本拠とする田中庄、常陸南部66郡、620町歩にわたるといわれた信太、新治台地を主城とする南庄、相馬一帯にわたって相馬御厨、水戸市吉田周辺を支配した吉田庄などがななものとして今にその面影を語り伝えられている。

その後、平将門一門、源謙等の骨肉相ばむ角逐を経て鎌倉時代に入つては、大槻氏、久慈佐竹の郷にあっては佐竹氏、筑波小田の豪族小田氏、北総結城の邑にあった結城氏等が地方に騎を唯えていた。南北朝時代にあっては、これらの豪族及びその一門輩下が、あるいは南朝に味方して北畠親房を迎へ、あるいは北朝に走つて高橋冬の傘下に馳せさんじて相争つたが、南風競わず、足利の制覇後は徳川氏の開業成立までの常総一帯は、鎌倉関東管領や古河公を中心としてほとんど騒乱に終りし、大小の豪族は次第に陶汰されて行つた。

下つて江戸時代の常総は、水戸の外、宍戸、土浦、麻生、笠間、下館、石岡、牛久、下妻、谷田部、古河、結城、松岡、志筑、竜ヶ崎、松川の16藩が城郭を構え、その間に前橋、仙台、川越、守山、佐倉、壬生、淀、高岡、峰山、長瀬、小田原、飯野、一の宮各藩及び一橋、田安、山中諸家の領有地が点在し、さらに要衝は幕府の直轄地又は旗本の采地となっていた。

明治維新と共に幕府直轄地又は旗本の采地は常陸県知事、上総安房県知事、下総県知事の分治するところとなり、明治2年2月常陸県知事の管地を若森県、上総安房県知事の管地を宮谷県、下総県知事の管地を葛飾県と県名を定めた。超えて明治4年7月廢藩置県となり、前述の16藩はそのまま県となった。

次いで11月、従来の府県制を改め、全国を3府72県に分けるに至り、若森、土浦、石岡、志筑、牛久、竜ヶ崎、麻生、松川の8県を廃して新治県を土浦に置き、新治、筑波、河内、行方、信太、鹿島、香取、匝瑳、海上の9郡を管轄し、結城、古河、葛飾、佐倉、関宿、曾我野、生実の7県を廃して印旛県を佐倉に置き、下総9県を管轄、また水戸、宍戸、笠間、下館、下妻、松岡の6県を廃して茨城県を水戸に置き、多賀、久慈、那珂、茨城、真壁の5郡を管轄するに至つた。

次いで明治6年6月印旛県を廢して千葉県に併合、明治8年5月新治県が廃され、新治、筑波、河内、行方、信太、鹿島郡を茨城県に、香取、匝瑳、海上郡を千葉県に移し、さらに下総の結城、猿島、岡田、豊田4郡と、葛飾、相馬の2郡の一部を茨城県に編入し、明治11年12月茨城郡を東西2郡に分割、相馬郡を北相馬郡、葛飾郡を西葛飾郡と改称し、明治22年4月市町村制の施行により東茨城郡の内を割いて水戸市を置き、明治29年4月結城、岡田、豊田の3郡を廢して結城郡を置き、西葛飾、猿島の2郡を廃して猿島郡を設け、信太、河内郡を廃して、その大部分をもって稻敷郡を置くと共に、一部を新治郡及び筑波郡に編入した。そのほか明治28年4月及び明治32年4月に本県と千葉県の間に若干の境界変更があり、昭和28年1月の町村合併促進法施行以来、窮屈せる地方財政の再建と行政事務の簡素化と能率化を図るために町村合併という歴史的大事業が着実に進められ、従来の大きい町はほとんど新市となり、町村数は急減した。すなわち昭和45年3月における本県の市町村数は16市45町31村となり、各市町村とも地域住民の福祉増進をはかり、明るく住みよい豊かな郷土が建設されている。